

沖縄県立郷土劇場

第三十一回

かりゆし芸能公演

玉城流 翠扇会

沖縄県立郷土劇場

平成十九年十一月二十三日(金・祝)

受付・十八時三〇分 開演・十九時



(組踊 執心鐘入)

組踊 執心鐘入

金細工

藤田佳子(カナ)
幸喜菊枝(モーサー)
永山マサ子(アンマー)

魔

ハフグッド・みどり 志慶真京子

花風

金城清一

秋の踊り

上間妙子 仲宗根吉子 富浜文子 蔵元昌子

稲まづん

ハフグッド・みどり 志慶真京子 藤田洋子

若松 上地美智子
宿の女 玉城敦子
座主 糸満盛幸
小僧一 大城常政
小僧二 西門悠雅
小僧三 大城沙都稀

鑑賞を希望される方は、出欠はがきにてお申し込み下さい。チケット代は2000円です。チケットは、鑑賞日当日、劇場の演劇学会専用受付にて料金と引き替えにお渡します。

事前のお申し込みが無い場合、当日のご鑑賞は残席のある限りは可能ですが、当日料金（¥2,500）でのご入場となります。

琉球舞踊

琉球舞踊は、祭祀舞踊（輪踊り）の「拝み手」「こねり手」「押す手」や民俗芸能などが宮廷舞踊（古典舞踊）の中に取り入れられ、王朝時代に式楽として発達した。琉歌を三線にのせた老人踊り、若衆踊り、二才踊り、女踊り、打組踊りである。廃藩置県以降は、近代の商業演劇（沖縄芝居）の中から一般庶民の趣向にあった雑踊り「花風」「金細工」などが登場、古典と競演し、享受されてきた。戦前まで祭祀芸能以外の舞踊（古典舞踊や村踊り）は、主に男性によって継承されていたが、17世紀から辻遊郭のジュリなどもまた琉球舞踊の継承者だった。戦後は多くの女性たちが琉球舞踊の裾野を広げている。

組踊

組踊は、歌三線（音楽）、唱え（台詞）、踊り（舞踊）を総合した楽劇である。一七一九年、中国皇帝の使者（冊報使）歓待の宴で、躍奉行・玉城朝薫（一六八四—一七三四）によってはじめて組踊「二童敵討」と「執心鐘入」が上演された。「銘川子」「孝行之巻」「女物狂」を含めた朝薫の五番は、古典組踊として高く評価されている。他に平敷屋朝敏の「手水の縁」、田里朝直の「万歳敵討」などを含め、琉球王朝時代に70作品が創作されているが、その多くは「敵討物」である。一九七二年、組踊は国の重要無形文化財に指定された。

花風

明治20年代初期に辻遊郭端道の劇場で創作された代表的な雑踊り。辻遊郭のジュリが遠く船旅に出る恋人を三重城から見送る情景を写實的に描き出す。「乙姫劇団」の初代団長上間郁子や男役女優上間初枝の花風は氣品に満ちていた。

金細工

金細工職人加那兄（カナヒー）としっかり者のジュリ真牛（モーサー）、抱え親のアンマーの三人で踊る打組踊り。放蕩者の加那兄が真牛を一月も連れまわしたあげく、その揚げ代を工面できず那覇の泊高橋から身を投げようとするが、真牛は蓄えていたお金を惜しげもなく出し加那兄の面目を施す。明治28年、玉城盛重によって村芝居の人氣曲に振り付けされた。加那兄は実在の人物。戦前の辻遊郭やジュリと村々のつながりを髣髴させる。

組踊 執心鐘入

美少年、中城若松は首里王府に奉公に上がる途中、日が暮れて山中の一夜の宿を乞う。計らずもその家は若松に恋慕していた女の家であった。女は好機とばかりに若松に言い寄る。若松は居たたまれなくなつて末吉の寺に駆け込んで救いを求め鐘の中に匿つてもらう。追つてきた女は鐘の中に隠れている若松を知り鬼女となつて殺そうとするが、寺の僧たちの説伏により鬼女は滅せられ若松は助かる。

作品中に演奏される古典音曲六曲の内五曲が宿の女の心情を謡っていることから、この組踊の主人公が若松ではなく、宿の女で、その激しい執心と変身が圧巻！「道成寺」ものの系列作品としてよく比較されるが、才色兼備の若松の話は『おもろさうし』巻二に登場する。

演目解説

金城清一

プロフィール



（花風）

昭和16年 那覇市久茂地に生まれる。
昭和36年 玉城盛義琉舞道場入門。
昭和46年 師匠免許証拝受。
昭和61年 国指定重要無形文化財組踊（総合指定）保持者認定される。
平成16年 沖縄県指定無形文化財（沖縄伝統舞踊）保持者。

沖縄県立郷土劇場



モノレール(ゆいレール)「旭橋」下車1分。国道58号線沿い。
那覇市東町1-1 tel: 098-866-2341